

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

萩原ゼミと新聞記者生活：現場主義の重要性を再考しながら

著者	阪東 峻一
出版者	法政大学経済学部学会
雑誌名	経済志林
巻	80
号	4
ページ	173-188
発行年	2013-03-15
URL	http://hdl.handle.net/10114/7891

萩原ゼミと新聞記者生活

——現場主義の重要性を再考しながら——

阪 東 峻 一

1. はじめに

大学を卒業して、まもなく5年を迎える。その後、大学院に進学して新聞記者になってからも、3年が経とうとしている。

萩原教授の退官を聞き、ついにその時が来たのかと、時の経過の早さを感じた。ゼミの同期が懐かしくなり、久しぶりに連絡を取ってみるとともに、パソコンのハードディスクに保存された学生時代の写真を開いてみると、懐かしい記憶がよみがえった。

萩原ゼミでは、「見学会」と呼ばれる行事を前期と後期の、年2回開催していた。経済学を含めた文科系は一般的に、専門書やテキストを中心に進めるため、教室での学習に偏りがちではあるが、見学会は、東京の地の利を生かして、政治や経済の現場に、実際に足を運んで、自分の目で見て、考えて、企業などの担当者に直接尋ね、疑問をぶつけることをしていた。

大学のゼミの行事であるので、専門的なものではなく、一般教養的な広く浅いものではあったが、新聞記者が取材のたびに現場に出かけ、当事者に話を聞き、写真を撮り、原稿を執筆していく。この作業は見学会とまったく同じであり、思い返してみると、私が記者を志した動機の一つに見学会、ゼミでの経験が大きく関わっているように思われる。萩原ゼミに入らなかったら、いま現在は、違う仕事をしていたかもしれない。

懐かしい写真や資料を紐解きながら、萩原ゼミでの体験と記者生活を振り返りつつ、今後目指すべき方向を自分なりに考えてみたいと思う。

2. 記者になって

現在私は、読売新聞西部本社で記者をしている。読売新聞は東京本社、大阪本社、西部本社の3本社制をとっており、西部本社は山口県と島根県西部から沖縄県までを取材エリアとし、新聞製作を行っている。

法政大学を卒業後、早稲田大学大学院経済学研究科を経て、2010年4月に記者職として採用され、宮崎支局に配属された。読売新聞や朝日新聞、毎日新聞などの全国紙では、新人は決まって警察担当になる。いわゆる「サツ回り」である。事件や事故の取材から、警察・検察・裁判までの司法を担当する。

警察の規制線が張られ、物々しい空気の中で行われる殺人や強盗事件現場での鑑識活動。やじ馬でゴった返し、夜空を真っ赤に染めて燃え上がる深夜の住宅火災。あまり熱心ではなかったが、警察関係者の自宅を訪問して最新の捜査状況を取材する「夜討ち・朝駆け」。事件や事故で亡くなった、行方不明になったりしている人物の顔写真を紙面掲載するために、家族に提供してもらう「ガンクビ」取り、が記憶に残っている。

記者には避けて通れない「抜き抜かれ」も、数え切れないほど経験した。事件や事故は、事案の発生や被疑者の逮捕だけでなく、その後の捜査の進展や逮捕後の犯行動機の供述なども重要なニュース、いわゆる特ダネのひとつとなる。先に記した夜討ち朝駆けが重要になってくるのだ。さぼっているとすぐに他社に抜かれ、早朝から電話がかかってくる。

労働経済では、仕事をしながら、業務内容を覚えて、次第に熟練していくOJT (on the job training) の重要性を指摘している。

新聞社にOJTはほとんどなかった。即戦力として期待され、容赦はなかった。入社後、本社で3週間の研修を経て、支局に配属された。初日は警察

などへのあいさつ回りだったが、もう次の日には、支局長からイベントのプレスリリースが手渡され、「この取材に行ってくれ。写真付きの30行程度で」である。記者デビューは、県庁前で行われた農産品の直売市だった。

さらに入社した2010年度は、宮崎県の出来事が、連日全国ニュースで取り上げられた年でもあった。家畜伝染病・口蹄疫¹⁾の感染拡大、鳥インフルエンザの発生、霧島連山の新燃岳（1421メートル）が52年ぶりに大噴火²⁾したのであった。

口蹄疫の際は、農場の出入り口は消毒用の石灰で真っ白になり、幹線道路に設けられた消毒施設が各地で見受けられた。

新燃岳の噴火は1月末の出来事だったが、火山灰が山肌に多く降り積もったせいで、梅雨の時期になっても、土石流災害の発生が懸念されて警戒が続いた。「避難準備情報」や「避難勧告」が発令されるたびに、住民は近くの公民館などに避難を余儀なくされた。避難所の体育館で疲れ切った表情を見せるお年寄りへのインタビューは心苦しかった。

ただごとでないことが身の回りで次々に発生し、なりふり構わず、取材し、原稿に仕上げ時間はあっという間に過ぎた。

スポーツや地域の行事も取材し、経験を積んだ。特に夏の高校野球の県大会取材は2年間担当して、深く印象に残っている。大会前の連載の企画から始まり、県内51校の地方大会の全試合を約2週間にわたり取材した。南国・宮崎の夏の日差しは厳しい。「焼ける」というより、「焦げる」とい

1) 2010年8月27日・2012年12月4日『読売新聞』牛や豚など蹄のある動物がかかる伝染病で、症状は発熱やただれなどで、治療法はない。2010年4月20日に都農町で発生が確認された。県内26市町村のうち、5市6町の292施設で感染が発生し、殺処分を前提にしたワクチン接種対象も含めると、約1300施設の牛と豚など計29万7808頭が処分された。県の試算では、畜産や食肉加工、商工観光などの経済損失額は約2350億円に上る。

2) 2011年1月28日・2012年1月22日『読売新聞』2011年1月26日から活発化し、27日に1959年2月以来、52年ぶりの爆発的噴火が発生。30日には火口にたまった溶岩が膨張し、麓の高原町が1158人に避難勧告を出した。さらに2月17日には都城市が2523人に勧告を出した。9月7日以降は小康状態が続いている。

図1 高校野球取材の様子 サンマリノスタジアム宮崎にて 著者は左側



う表現のほうが適切だろう。悔しさを噛み締め、涙を拭いながら言葉数少なく取材に応じる高校球児に、もらい泣きをさせられそうになりながら、シャッターを切り、取材を進めた。

入社から2年経った2012年4月には早くも転勤になり、都城通信部に移動した。都城市は宮崎県と鹿児島県の県境にある人口約17万人の県内第二の都市で、農畜産業が盛ん。都城市のほか、小林市やえびの市など3市2町を担当している。行政や市町議会、首長選挙、地域のニュースなど、取り扱う内容の幅は広い。警察担当とは全く違う毎日だ。

初対面の人と話することにも、物おじしない性格で、世の中の動向には関心があるほうではあるが、わかりやすく書くためには、その前に自分が物事を理解し、分かっていないといけない。経済や歴史の知識は人並みにあったつもりだが、記者が取り扱う内容はとてつもなく幅広い。法律や行政、文化とこれまでに触れたことのない畑違いの内容ばかりである。宮崎の土地勘もなく、すべてが一から勉強の連続で、何一つとして同じニュースはない。わからないことは自分で勉強するか、取材先に聞いて見識を深めていかないといけない。記者は謙虚であれと言うがまったくその通りで、不甲斐ない不勉強な自分に鞭を打つ毎日である。

3. 萩原ゼミでの経験

大学は浪人生活を経て入学した。サークルやアルバイトなどの学生生活を楽しむ仲間が多い中、人より歳を重ねて入学したことで、学生生活は少し冷めていたように思う。東京でないとできない経験をしたい。遅れを取り戻したい。充実した学生生活を送りたい。ただ、それだけを考えていたように思う。

経済学部では、1回生の終わりにゼミを決めることになっていた。萩原ゼミの案内を見た。「社会見学を通し、現場に足を運び“生きた経済”を体感し、経済を身近に考えます。ゼミの人気行事の一つで、国会議事堂・日本銀行・東京証券取引所には必ず訪れるようにしています。」とあった。これだ。萩原教授が専門とする労働経済というのもよく分からなかったが、東京でしかできない経験をしたい。いろんなところに出かけられて楽しそう。非常に安易な気持ちで選んだ。

選んだゼミは間違いではなかった。当たりだった。社会見学会を訪れたのは初めてのところばかりで、テレビや新聞とでは違う、政治や経済の生の現場を見ることができた。

萩原教授によれば、そもそも見学会の始まりは労働調査の延長だったそうである。学生に調査することの大切さを感じてもらうことと、机上だけでの学問ではなく、「百聞は一見に如かず」「論より証拠」といったように、経験することを大切に、地に着いた知識を習得させるためだったそうである。

表1は、ゼミの3年間で訪れた主な施設である。企業の工場などから、博物館や資料館と、政治や経済を幅広く出かけた。

近頃はテレビでも、工場見学などを取り扱った番組を数多く見かけるようになったが、特に工場などでの社会見学の醍醐味は、なんと言っても目の前で製品ができあがっていく点であろう。普段から店先で見かける製品の製造工程が分かるので、おもしろくて仕方ないわけである。ただ、写真

表1 ゼミの見学会などで訪れた施設

年月	目的	見学場所
2005年8月	前期見学会	日産自動車追浜工場・キリン横浜ビアビレッジ
2005年11月	後期見学会	日本銀行本店
2006年8月	前期見学会	東京証券取引所・東京工業品取引所・東京穀物商品取引所
2006年11月	後期見学会	日本航空羽田空港機体整備場・森永製菓鶴見工場
2007年2月	追い出しコンパ	旧足尾銅山
2007年2月	春合宿	戦艦三笠記念館
2007年8月	前期見学会	皇居・国会議事堂・経済産業省副大臣室
2007年11月	後期見学会	樋口一葉忌・国立科学博物館上野本館
2008年3月	卒業旅行	大阪証券取引所・適塾・大阪城・難波宮跡・旧大阪紡績工場・造幣局

図2・3 見学会の様子（国会議事堂と日本航空羽田空港機体整備場）



を撮ったり、おもしろがったりしているだけでは、単なる物見遊山にすぎない。そこから日本経済の現状や企業努力、担当者から最新の情報や展望を聞くことが社会見学の目的なのである。

その中でも、特に印象に残っているのは、東京証券取引所や国会議事堂だ。東証はコンピュータ化が進み、大型の液晶ディスプレイに企業名や株価がスタイリッシュに踊っていた。これらは見学用に設けられた演出で、かつて行われていた立ち会いでの取引は過去のものになっていた。当時の株価は1万5000円程度だったが、バブル経済の最盛期には、平均株価は4万円に届かんとするところまで行き、日本経済の強さを世界に示した場所でもある。ここからバブルが生まれ、そしてはじけた。日本経済の盛衰を

肌で感じたような気がした。

国会議事堂は、広い敷地に大理石などの豪華な石材がふんだんに使われた立派な建物だった。国政の中心地であることを感じた。関東大震災で明治の建物は被災。現在の建物は1936年に完成したものであるが、復興に取り組みさらに上を目指そうとした、当時の気概や威信のようなものも感じた。本会議場は数々のドラマが繰り広げられ、国の行く末を左右する決断がなされたと思うと胸が高鳴った。政治にも興味関心が沸いたきっかけにもなった。

社会見学は、教授からのお誘いもあり大学を卒業後も続いた。ゼミの見学会は大人数で行動するため、東京を中心としていたが、レンタカーを借りて、近郊の県まで足を伸ばした。表2は、訪れた主な施設である。

こちらは焼き物や製糸業など、当時萩原教授がされていた研究に即したものが多く、理解を超えた内容も多かった。ただ移動中に行われるマンツーマンでのレクチャーのおかげで理解も追いつき、担当者にじっくり話を聞くことができた。大学の教授と現場を回って、詳しい解説までしてもらえる。これほど贅沢な授業はなく、これこそ本当のフィールドワークではなかったであろうか。

後述するように、大学院では、日本経済史を専攻したが、戦前の日本の基幹産業だった製糸業のこと、鉄道開通前は舟運（河川の輸送も含む）が

表2 大学卒業後に訪れた施設

年月	所在地	見学場所
2008年3月	群馬県	富岡製糸場
2008年7月	神奈川県横浜市	氷川丸・横浜税関・外国人墓地
2008年8月	鹿児島県	仙巖園・美山薩摩焼窯元
2008年10月	静岡県	登呂遺跡・久能山東照宮
2008年12月	群馬県桐生市	桐生倶楽部・桐生燃系合資会社事務所棟
2009年6月	栃木県	益子参考館
2009年8月	佐賀県	吉野ヶ里遺跡・大川内鍋島窯跡・柿右衛門窯元
2009年11月	栃木県足利市	木村輸出織物工場跡

図4 繭から糸を取り出す作業体験の様子（富岡製糸場にて）



大きな役割を果たしていたこと、関東周辺で大消費地・江戸に対して商工品の製造と供給をしていた、いわゆる地廻り経済圏のこと、などへの理解に大きな手助けとなった。

シルクはネクタイなどの素材に身近に使われているが、現在国内で生産される生糸は少ない。訪れた富岡製糸場では、地域のボランティアガイドの方が実際に蚕を煮て、糸を取り出す実演をしていた。図4のように、お湯の中でぐるぐる回る蚕から糸の切れ目を見つけ出し、巻き上げていく。作業は熱湯に手を付けるので熱い。そして蚕を煮たときに出る独特の生臭いにおい。製糸工場のルポなどを読むと臭いに対する記述が散見されるが、話では分かっているけどどういふものかは分からずにいた。現場に行くということは、熱さや臭い、その場の雰囲気など、五感で体感することであると実感した。

4. 大学院時代に学んだこと

法政大学を卒業後は、早稲田大学大学院経済学研究科（日本経済史・川口浩研究室）に進んだ。

大学の卒業論文では、戦後のモータリゼーション以降の自動車の売れ筋モデルと消費者の行動の変化を記した。

経済史では、生産の面、つまり供給サイドから、その変化を論じることが多い。例えば、先述した生糸を例に挙げると、農家の副収入になるとともに、欧米向けの輸出が増え、外貨を稼いで戦前日本の基幹産業の一つになった、であるとか、第一次世界大戦を境に重化学工業化が進み、日本も工業国の仲間入りを果たしたなどである。

一方、消費は社会学や家政学などでは取り上げられるが、経済史での記述は少ない。そこで消費という観点からものごとを考え、さらに日本の都市型消費の原点を探りたいと戦間期に誕生した新中間層、つまりサラリーマンの生活様式を研究課題とした。

大学院での研究は、学部とは全く異なっていた。より専門分野に特化し、先行研究をどう乗り越えるか。時に批判的に、または不足している部分の補完、視点を変えて違う切り口で議論すること、学問的貢献が求められた。

「論文はノリとハサミがあればできる」「いい資料に出会えるかは運」「歴史研究は時間がかかる」とも言われた。専門書や学会誌を一つずつ調べ読み込むこと、巻末の参考文献一覧に上がっている書籍に当たること、新聞や雑誌のバックナンバーを調べて当時の時代風景や資料として使えそうな材料を探ること、図書館に連日こもりコピー機の前に立つ地味な作業が続いた。

就職活動をしながらの、時間的制約が大きい研究生活ではあったが、卒業式では、経済学研究科の総代として総長から卒業証書をいただくことができた。大学院時代には、これまでに何が議論され、何が問題で、資料からどういうことが言えるのか、幅広い視点から物事を考え、切り口の鮮やかに論理的な思考を求められる、アカデミズムの作法を鍛えられたように思う。

5. ジャーナリズムの現状と課題

新聞業界に対する風当たりは厳しい。インターネットの普及、ライフスタイルの変化、若者の活字離れなどにより、新聞の発行部数は年々減少している。メディアスクラムによる人権やプライバシーの侵害、「記者クラブ」³⁾制度への批判など様々ある。新聞社も会社組織である。記者は一社員であり、数年で勤務地が変わる転勤が常につきまとう。ジョブローテーションの中での、記者のサラリーマン化も叫ばれている。

墮落するのは簡単だ。取材をする際、電話取材で済ませ、写真も提供してもらえれば、原稿は簡単に書くことも出来る。

仕事にも慣れ始めた入社2年目の頃だったと思う。祭りの取材に行くよう言われたが、「祭りなんて毎年同じなのに、何を書けばいいんだ」と、ぼやいたことがあった。上司に「新聞は新しいことを聞いて書くから新聞なんだ。今年から始まったイベント、去年とは違う何かを書かないと、その記事に意味はない」と怒られたことが記憶に残っている。

ただそれだけ批判が大きいのは、メディアに対する期待の裏返しなのかもしれない。

新聞記者になりたいと漠然と考えていた大学三回生の時、「法政大学自主マスコミ講座」に入った。記者やアナウンサーを目指す学生が入る勉強会で、大学のOBやマスコミ関係者が講師を務めておられた。その中で、記者として重要なことは、「虫の目」と「鳥の目」を持つことと、講師の読売新聞特別編集委員の橋本五郎氏がよく口にされていた。「ある政権の政策を考えると『虫の目』であって、それに時間軸や地理軸といった視点で、その政権が与える世界への影響、歴史的評価、こうした視点でものごとを考えることが『鳥の目』である」と紹介されていた。

3) 中央省庁や都道府県庁と警察本部、各市町村にも設けられ、新聞社やテレビ局などの大手マスコミが所属している。記者会見の取材は所属する会員に限定され、その閉鎖性や他のマスコミの自由な取材を阻害しているという指摘がある。また当局発表のニュース報道に偏り、メディアの監視機能が鈍ると危惧する意見もある。

一方で、元日本経済新聞記者の田勢康弘氏は著書⁴⁾の中で、「メディア・ジャーナリストの取材にかかる時間の短さである。明日かあさってにはわかってしまうことを今日取材し、今日書くというようなショート・レインジの仕事が多すぎるのである。アメリカのジャーナリストでかつてはニューヨーク・タイムズの記者だったニール・シーハンはベトナム戦争を扱った『輝ける嘘』(集英社)を書くのに十六年かかっている。十六年である。日本のメディア・ジャーナリストの平均キャリアはおそらく十六年よりもっと短いだろう。シーハンはその間、ほかに一切何も書いていない。(中略)取材・執筆に費やす時間の長さは驚くほどである。ジャーナリストの本来の重要な役割は、調査報道にある。歴史のベールをはがしたり、捜査当局の手が入っていないような巨悪を、徹底的な取材で暴く、それが使命のひとつである」としている。特ダネ合戦への警鐘と、情報公開制度などを活用した調査報道の重要性を問うたものである。

また、読売新聞の経済記者だった杉山美邦氏は、記者に求める要素として、以下の3点を挙げている⁵⁾。より高い専門知識で専門家と論争できるぐらいの研鑽を重ねること、問題意識を持って掘り下げられ切り込む能力、進んで幅広いニュースにぶつかっていく積極性の3点としている。

視点は少し変わり、NHKの「週刊こどもニュース」の元お父さん役で、お茶の間でも有名なジャーナリストの池上彰氏は、メディアに接する際の3つの留意点を挙げている⁶⁾。「ニュースというのは、極めて相対的なものである。そして、報道は間違えることがあるという、当たり前の事実だ」としている。近年よく耳にする「メディア・リテラシー」のことである。続けて池上氏は「さまざまな情報があふれかえるいま、あなたには、単なる「情報の受け手」ではなく、積極的に情報を読み解く力を身につけ

4) 田勢康弘『ジャーナリストの冒険』新潮OH!文庫、2002年、306～307頁。

5) 杉山美邦「経済記者入門」読売新聞東京本社教育支援部編『ジャーナリストという仕事』中央公論新社、2008年、69～70頁。

6) 池上彰『記者になりたい!』新潮文庫、2008年、308頁。

てほしいと思うのだ」と締めくくっている。

さらに、萩原教授は年に数回程度連絡を取る電話でいつもこう言われる。「現場で生の声を聞き、記すこと。なにより1次資料をつくる記録性に新聞記者の仕事には大きな意味がある。まとめて年に一度は本を出しなさい」と。新聞記者は当事者ではないが、歴史の目撃者であるとよく言われる。大学院の修士論文でもたくさんの新聞記事を引用させてもらった。日々の業務に忙殺されることもしばしばだが、自分に甘えているのだろう。まだまだ目標達成はできていない。

6. おわりに

ジャーナリストや新聞記者への課題や科せられた責務は様々である。ベテランの諸先輩方には到底及ばない駆けだしの記者ではあるが、記者として今後目指すべき方向をまとめてみたい。

第一に、切り口を鮮やかに、おもしろく書くことであろう。読者の貴重な時間を頂戴するわけであるから、つまらない記事は失礼にあたる。かつて同じイベントの取材にいったのにも関わらず、他社のベテラン記者が違う視点で書いたことがあった。自分の記事とは、全く違うイベントを記したように見え、どうしてこんなにも違うのか、自分の未熟さを感じさせられたものである。

また上司からも「どうして自分の原稿をつまなく書くのか。せっかく書くならおもしろく書け」と指摘されたこともあった。経験年数による部分も大きいだろうが、多角的に分析し、語彙力巧みに書く訓練を続けていきたい。

次に、ものごとを追跡取材することであろう。ニュースのきっかけは独自でつかんだネタでも、発表されたものであっても構わないと思う。一度きりの取材・執筆で終わってしまってはもったいないのである。

2年足らず前のことではあるが、口蹄疫の感染拡大や新燃岳の噴火災害

をリアルタイムで見た記者は、転勤で県内には少なくなってきた。ただ私は、幸いにして県内転勤であったため、現在も取材も重ねることができている。

口蹄疫関連では、2012年10月に長崎県で開催された「和牛のオリンピック」と称される全国和牛能力共進会⁷⁾で、全国38道府県から出品された480頭のうち、宮崎県代表は9部門中5部門で首席。さらには首席の中から選ばれる、最高位の優等首席も取るなどして、全国に復興をPRした。苦難を乗り越え、快挙を喜ぶ出品者の姿を目にすることができた。

新燃岳関連では、当方の担当管内にその山が鎮座している。降灰被害から立ち上がり、茶葉を紅茶に加工して付加価値を付けて販売を始めた製茶業者。火山灰の吸着効果を利用した消臭剤を開発した農業資材製造業者がいた。そして2012年7月には入山規制が一部で縮小され、登山客に人気の韓国岳（1700メートル）の山開きが行われ、夏山は待ちこがれた登山ファンでにぎわった。

時間を経て、少しずつ変わっていく様子を伝えることも大切なニュースなのである。

そして、ジャーナリストはアカデミックであれということである。日本の新聞記者は専門性に欠けるとよく言われる。新聞記者も大学院修了者が増えてきているが、大学院のアカデミズムを経験できたことはアドバンテージと考えている。記者は会社員であるため、転勤をはじめとする配置換え、扱う分野も幅広いため、非常に難しいことではあるが、時には専門家をうならせるような記事を書かなければならない。アカデミズムとジャーナリズムの両方を追い求めていくべきではないだろうか。まだ見つかっていないが、何か一つのテーマを見つけ、あのことならあいつに聞いてみようといわれる記者になりたいと思う。

7) 2012年10月25日『読売新聞』公益社団法人「全国和牛登録協会」が1966年から開催。全国から出品され、肉牛の質や種牛改良の成果を競う大会。雌雄や月齢などで9部門に分かれ、各部門で首席が選ばれる。

加えて、記事には読者に考えてもらう余地を残すような書き方をすることである。これはこうであると決めつけてしまい、情報を押しつけるのではなく、問題提起をして、投げかけることが大切ではなかろうか。そのためには、考え方が二分するような出来事を扱う場合は、片方の意見のみを記すのではなく、反対意見も記し、双方の言い分を記す必要があるだろう。こうしたことで、活発化する議論の中で、問題解決の糸口ののひとつが見えてくるかもしれない。

最後に、なにより現場主義であれということである。現場を見ることは思いこみの払拭や新たなニュースに気がつくなど自分の理解を大きく進める。理解すると原稿が書きやすくなり、結果として、読み手にも分かりやすい記事作成につながるのではないだろうか。新聞社には、たれ込みと言われる匿名の情報提供が多く寄せられる。真実の匿名情報もあるが、中にはガセネタも含まれている。裏を取ることが求められるが、裏取りの一つとして現場に行くことは大きな手段の一つでもあるのだ。心配性というわけではないが、現場に足を運ばず、電話取材した原稿にはどうも自信が持てないことがある。現場に行って話を聞く、写真を撮る、萩原教授に鍛えられた経験が身に染みついてしまっているのかもしれない。

プライベートでのフィールドワークもやっている。仕事が休みの週末はカメラを片手に県内の近代化遺産探訪を宮崎に来た時から続けている。宮崎は農業県の印象が強いが、農業県なりの明治以来歩んできた歴史があり、その中では質と量の双方からの発展も必ずみられるはずなのである。土木遺産や工場を見学するなどして見聞を深める作業を行っている。仕事とは別にテーマを持ち探求していくことはジャーナリストとして大切なことであり、楽しい生きぬきがあるということは、本業のモチベーション向上にもつながると信じている。

この小論を書くに当たり、入社試験で提出した書類を見返してみた。志望動機には「日本は経済が低迷し、事件や事故などの暗いニュースが連日報道されるが、町おこしなどで頑張っている人を積極的に取り上げて、世

の中を明るくするニュースを書いて、日本を元気にしたい」と記していた。
いつまでも初心を忘れない、向上心にあふれる記者でありたい。

The Hagiwara Seminar and a Newspaper Reporter
— Reconsidering the Importance of Focusing on on-the-spot Activities —

Shunichi BANDO

《Abstract》

Japan's mass media have been compelled to stand at a big crossroads. Many demands are made on newspaper reporters, and social expectations are great. Especially with regard to investigative reporting, a many-sided viewpoint is essential. It is important to visit a location on foot. As a participant in the Hagiwara seminar, I could enter the political and economic center of Tokyo and be trained in the fundamentals required to be a journalist. I would like to see the world with my own eyes and not be caught up in what may be regarded by others as common sense, but to think, to value, and to describe the words of the party concerned carefully, and do good work.